

生徒理解・生徒指導をどう深めるか

高知市立城北中学校教諭 川崎 寛子

1 はじめに

新聞やニュースで子どもたちの身に起こる事故や事件が多く聞かれるようになったのは、いつの頃からだろうか。生徒の問題行動へのかかわりといえば、非行対策といった生徒指導のあり方が優先されがちな場合もある。現状では、子どもたちの心は閉鎖され、自分中心の考え方や行動を押し通すことが当たり前のようにとらえ、他人とのかかわりがうまくできず、かかわりを持とうとしない実例が増えている。また、学校現場では不登校やいじめ、言葉の暴力や怠学、学力などの問題が浮き彫りとなり、家庭環境に関する虐待や親子関係のあり方等、児童生徒をとりまく環境は常にきびしい状況におかれている。大人社会においても「人」としての感情の劣化や尊厳の衰退、自尊感情の欠落やモラルの崩壊など、健全に子どもが育つにはあまりにも生活しにくい条件が増えつつある。そうしたなかで、問題行動を生徒自らの力で未然に防止することができる「心を育てる」といった積極的な支援のあり方が必要といえるだろう。

近年、学校現場では生徒支援や学級づくりに有効とされる質問紙法のQ-Uを用いて学級づくりが活発になってきている。けれども実際には、生徒理解あるいは問題のある生徒のかかわりとして十分なものに至っていない状態がある。先行研究でQ-Uだけでは把握しきれない生徒の状態を描画と合わせて理解することが有効と示されている。そこで、S-HTP（家・木・人を描く描画法）を用いて高知大方式生徒支援システムアセスメントを行い、学級の課題を見いだし、児童生徒が個々に持つ悩みや心配ごと、または心の奥に潜んでいる感情などを見立て、支援や援助を考えながらスムーズな人間関係をつくり、よりよい学校生活をおくる手立てを図ろうとした。

2 研究の目的

学校生活を快く過ごすため、Q-Uのみ用いていた学校にはじめてS-HTPを導入する。学校の特性の違いによってQ-UやS-HTPの結果に違いがあるか、また実施上の問題点はどのようなことがあるかを確認し、活用においてどのような工夫があるのか検証する。また、希薄になりがちな人間関係の構築にもあたる。

3 研究方法

(1) 対象生徒

A中学校 (2年 170人)

B中学校 (1年 158人 2年 154人 3年 156人)

(2) 実施時期

1回目 5～6月 2回目 10～11月

(3) 実施内容

ア Q-U（楽しい学校生活を送るためにアンケート）

(ア) Q-Uの実施

ア Q-Uの実施目的

「いごこちのよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」を使って学級の状態を把握する。

- b Q-U に示される分類
- (a) 学級生活満足群 学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている生徒。
 - (b) 非承認群 いじめや悪ふざけを受けてはいないが、学級内で認められることが少ない生徒。
 - (c) 侵害行為認知群 いじめや悪ふざけを受けているか、他の生徒とトラブルがある可能性が高い生徒。
 - (d) 学級生活不満足群 耐えられないいじめや悪ふざけを受けているか、非常に不安傾向が強い生徒、要支援群の生徒はその傾向がさらに強い。

イ S-HTP

(ア) S-HTP の実施

a S-HTP の実施目的

個別の適応性や状態を読みとり、配慮や支援につなげる。

b 実施手順

- (a) 準備物 A4 ケント紙 1 枚 HB 鉛筆
- (b) 教示

「家・木・人を入れて何でも好きな絵を描いてください」

「裏に絵の説明を書いてください」

(c) 留意点

- ・絵の上手下手を見るのではありません。
- ・用紙は横に使用し、さしは使わない。
- ・写生のように描いたり、人を棒人間に描いたりしない。
- ・いいかげんではなく、できるだけていねいに。
- ・となりの人の絵を見たり邪魔したりしない。
- ・裏の右下に、クラス・出席番号・名前を書く。
- ・時間は 20 分ほどです。

c 描画の分類基準と示される生徒の特徴（表 1）

- (a) 圧縮 与えられた課題のみに対応するので、教示に対して真面目に反応しているように見えるが、課題に対し反応が硬く自由さがないので対人関係が広がりにくい傾向にある。自己表現ができるよう配慮し、個性をうまく引き出し生かせる画面を工夫したり、対人関係を円滑にする画面設置を心がける。カンファレンス（個別支援を要する）を必要とする描画の特徴。
- (b) 未熟 行動面において幼さが残り、未熟・混乱・幼稚な表現が見られる。役割を与えて努力の過程を具体的にほめたり、様々な場面に励ましや声掛けを多くする。カンファレンスを必要とする描画の特徴。
- (c) 不全 現実への順応を優先させ個性が出せない。自己の世界を作ることが苦手であり、対人関係が広がりにくい。暗さや寂しさ等が表れた場合の描画はチェックする。コミュニケーションを大切にし、自己表現ができるよう配慮する。活動後に自信を持たせる評価の工夫をする。
- (d) 調和 課題に対して柔軟に反応でき、自分の世界を自由に表現でき現実から大きく逸脱せず対応できる。適度な余裕や遊び心があり、周りの雰囲気に合った対応ができる。対人関係が豊かで、心も安定している場合が多い。特別な個別 支援の必要はないと思われるが、観察や声掛けをこころがけ、些細な変化に注意する。暗さや寂しさ等が表れた場合の描画はチェックする。
- (e) 破壊・攻撃 破壊や攻撃、衝動など感情のコントロール不良の状態が見られる。日常の

ストレスをうまく発散できず内面に葛藤を抱えている。部活動や自分の好きなこと、得意なことなど、自分なりのストレス解消法と一緒に考えたり、様々な場面において声がけを忘れずかかわりを多く持つ。カンファレンスを必要とする描画の特徴。

(f) 逸脱

素直に課題に取り組むことができず、現実から逸脱するような独特な自己の世界を持っている。自己顯示欲が見られる。日頃から声がけをし、信頼関係をつくる。話をじっくり聞いてあげたり、後押しする指導や声がけをする。保護的に安心できる居場所をつくる。カンファレンスを必要とする描画の特徴。

表1 S-HTP 分類表 2010

分類	描画の特徴	適応状態(生徒の特徴)	※チェック △カンファレンス
圧縮	家・木・人のみ描かれ構成に配慮がない	●課題に対し反応が硬く自由さがない ●無気力、意欲の低下	△隅に小さく絵がある △ストレスを抱えている
未熟	絵の表現が未熟で混乱性が見られる	●行動面において幼さが残り、未熟・混乱・幼稚な表現が見られる	△個別支援が必要
不全	家・木・人に付加物があり、1つ1つはよく描けているがそれぞれとの関係や構成、大きさに配慮が乏しい	●現実への順応を優先させ個性が出せない ●自己の世界を作ることが苦手である ●対人関係が広がりにくい	※構成に配慮が全くな い △課題に即した適応が苦手
調和	バランスよく構成にまとまりがあり、自由で豊な表現ができている	●自分の世界を自由に表現でき、現実から大きく逸脱せずに対応できる ●課題に対して柔軟に反応し適度な余裕や遊び心がある ●周りの雰囲気に合った対応ができる ●対人関係が豊かで心も安定している場合が多い	※印象が暗い、木に窓などがある △悩みや苦しさなど、今の状態からの逃避願望がある
破壊・攻撃	攻撃性、破壊性、統制の不良が見られる	●心がコントロール不良の状態で、問題を抱えていることが行動面に表れる	△特に個別支援が必要
逸脱	攻撃性はないが教示から逸脱し、孤独・逃避性がある 何かのメッセージ性がある	●素直に課題に取り組むことができない ●現実から逸脱するような独特な自己の世界を持つ	△メッセージ性のあるものは学校で目立たなくて心に問題を抱えていることが多い

- ・「破壊・攻撃」「圧縮」「未熟」「逸脱」にはチェックがなく、すべてカンファレンスである。
- ・チェックよりカンファレンスがより要支援。

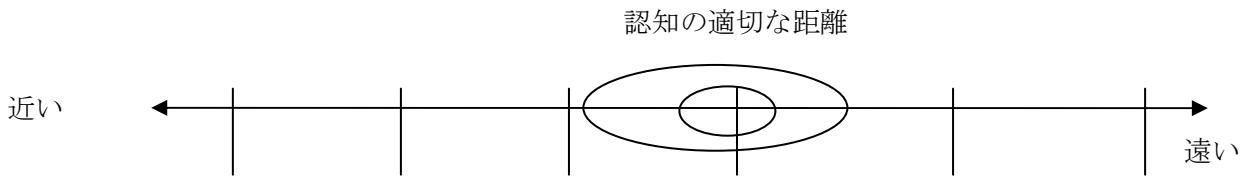


図1 支援の必要性とS-HTPに示される特徴の関係

ウ 心の冒険教育（学級活動や行事など学校生活の様々な場面での体験学習）

(ア) 心の冒険教育の実施

a 心の冒険教育の実施目的

- (a) グループでの活動（アクティビティ）を通して、気づき・楽しさ・安全の中で協力し合える人間関係を作る。
- (b) 安心できる環境の中で、活動を通して問題解決能力・自己解決能力を身につけ「生きる力」を養う。
- (c) 「楽しさ」を大切にしながら、「協力することはどんなことか」「仲良くすることはどんなことか」ということを自ら体験することで理解し、信頼関係を築く。

エ Q-U・S-HTPの結果を総合的評価

(ア) Q-Uのプロット図にS-HTPの分類を重ね合わせる。

(イ) Q-Uでの位置づけにかかわらず描画の分類でチェックまたはカンファレンスが必要とされた生徒を複合プロット図では赤印で示す。

5 研究結果と考察

(1) Q-UとS-HTPの実施

B中学校で実際にS-HTPを実施した後、A中学校でもS-HTPを実施した。S-HTPをはじめて実施するにあたって、2年団の教員に先行研究での有効性と、S-HTPについての説明を行い理解を得た。S-HTPという言葉すら初めて耳にする教員や、名前は知っていても実際に行ったことがない教員の中には、生徒にも受け入れられるだろうかという心配を感じた者もいた。しかしすんなりと実施できた。また、担任の教員をはじめ学年団の教員の誰でもが実施できるように、5クラス一斉に実施し全員が参加することで実施内容を体験的に理解した。

多くの場合、Q-Uのプロット図を見るときに、担任はまず全体の分布を見て、要支援の生徒がないいかチェックし、不満足群に注目する。問題行動や気になる生徒が満足群にいると、疑問を抱くことがある。また、Q-Uの質問にきちんと答えない（全部3とか、全部1とか、全部5とか）生徒がいるのでプロット図を完全に信用できないことがあるというアンケート調査の限界もある。こうしたことから不満足群の気になる生徒だけでなく、満足群も含めた全体への理解とアプローチの手立てとしてS-HTPを導入し、支援のあり方を考えた。

A中学校ではS-HTPについての知識がないと難しいのではないかと言われていたが、分類の具体例をもとに担任に分類してもらった結果、専門家とA中学校の教員の一致率は約50パーセントであった。継続的に行っているB中学校では、専門家との一致率が約80パーセント近い教員もあり、継続して行くことの重要性が示された。

あるクラスのQ-UとS-HTPの複合プロット図を見ると、Q-Uの群の中では大きな変化はないけれど描画では大きく変わった生徒もいる。例えば図2に○で示した生徒は、1回目のQ-Uで満足群にいて、特に目立つこともない生徒だが、描画をみると逸脱などカンファレンスの必要となる特徴が見られた。これはQ-Uだけで見ていると、教師は満足群にいることで安心感があり見過ごしてしまうという危険性を示唆した一例である。

2回目のQ-Uでは□や△で示したように要支援群の生徒が不満足群に変わったり、△のように群の変化はなく満足群でいた生徒が、描画ではカンファレンスの必要ない調和や不全に変化していた。このクラスでは1回目の結果、カンファレンスを必要とする生徒は9人いたが、2回目の結果では5人と減少していた。この減少は、他のクラスにも出た結果である。描画の中から読みとった個々への気配りと学級での仲間づくりの活動が影響していると考えられる。

A中学校・B中学校ともプロット図には大きな違いはなく、Q-UとS-HTPを同時に実施する困難性も感じないので、同じ中学生として生徒理解や支援を図るうえで有効に活用できると考える。

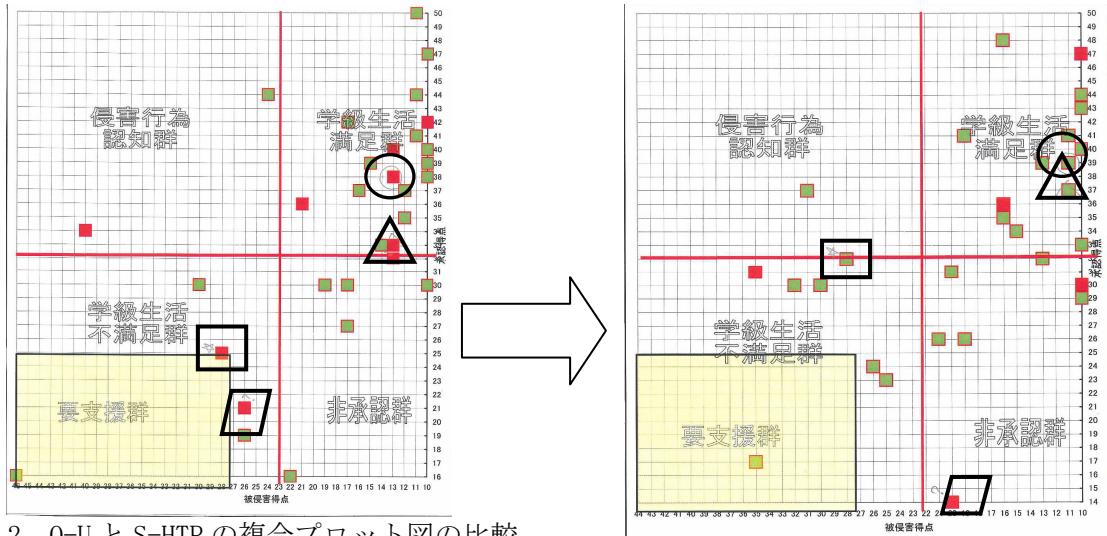


図2 Q-UとS-HTPの複合プロット図の比較

(2) 心の冒険活動の実施

B中学校では数年前から心の冒険活動を取り入れている。Q-U、S-HTPを実施する間に活動を取り入れるとより効果的であるため、計画的に活動が行われている。A中学校では、エンカウンターなど取り入れたりしているが、今回心の冒険活動も行った。

行事がたくさんあり、何かと落ち着きのない2学期を向かえるにあたり、9月はじめに集団活動を学年で行った。170人という大人数と個性豊かな生徒の集団ということで、きちんとできるだろうかと不安要素がある中で行ったが、意外にスムーズに行うことができた。生徒たちの反応も新しい発見があり、自分を見直すことができたなどの振り返りができた。

次に、体育祭に向けて協力することの大切さや、一人ひとりの必要性を意識づけるため、ビーイングを行った。これは、個人目標から班目標へ、そしてクラス全体への高まりを感じるとともに、仲間づくりの手段とした。



写真1. ビーイングの取り組み

保健室登校をしている生徒にも、クラスの一員としてビーイングに参加して体育祭の目標を立ててもらい教室に掲示した。生徒の間から「一緒に練習しよう」と声がけがはじまり、徐々に練

習にも参加しだし、体育祭当日は一緒に競技に出場できた。その後、家庭科や体育などの技能教科に参加できる時もある。この保健室登校の生徒は、Q-U では不満足群から満足群に変化した。S-HTP の描画では不全のままで変化が見られたとは言えないが、今回のアセスメントとアプローチをきっかけに生活の状況は少しづつ変わっている。Q-Uだけでは見過ごしがちな場合でもこのように変化があり、次年度への継続的なアセスメントとアプローチがより重要になってくる。

(3) 複合プロット図でみた男女比

研究をしている中、男女比に特徴があることに気づいた。A中学校B中学校とともに、プロット複合図でカンファレンスとなった数は1回目より2回目の方が減少しているが、その中の男女の割合は圧倒的に男子が多い。

表2は学年全体におけるカンファレンスの人数割合であるが、A中学校、B中学校とも同じ割合が表れた。また男女比においても(表3)、1回目と2回目とのカンファレンスの同一者においても(表4)同じ割合であった。これより学校間の差はないと考える。

表2 カンファレンスの人数変化

	1回目 カンファレンス人数	2回目 カンファレンス人数
A中	37人／167人中 (22%)	27人／162人中 (17%)
B中	30人／153人中 (20%)	26人／154人中 (17%)

表3 カンファレンス男女変化

	1回目 カンファレンス人数	2回目 カンファレンス人数表
A中 男	24人／37人中 (65%)	22人／27人中 (81%)
女	13人／37人中 (35%)	5人／27人中 (19%)
B中 男	24人／30人中 (80%)	21人／26人中 (81%)
女	6人／30人中 (20%)	5人／26人中 (19%)

表4 カンファレンスの同一者

	1回目・2回目ともカンファレンスが必要とされた割合
A中 男	10人 (91%)
女	1人 (9%)
B中 男	11人 (91%)
女	1人 (9%)

中学生になると、S-HTP に表れる特徴で男女における有意差のある項目は 22 項目と増え始める(2010 三上)。ただ、それらの項目は内容的に拡散していて、両者の差異を明確にすることは難しい。特徴的な点を挙げるならば、男子に多く見られていた遠近感のある描写は、この時期では女子の方がやや多くなり、男子の方では、人が小さく記号化され、顔が省略されて描かれる傾向がより多く見られた。この背景としては、中学生の男子では指示通り課題にしたがって描くことにより強く抵抗を示し、また、その抵抗の仕方もより自己主張的に独自の表現をとろうとする傾向が強い。しかし、この時期はそれが必ずしも成功せずに、かえって分類でいう距離が不適切な絵になってしまう

ことも多いようである。全般的に男子の方の表現が多彩で、中には屈折した表現もかなり多く、この時期の微妙な思春期心性をより鮮明に映し出しているようであった。これは、S-HTP 法の中で三上が指摘している。

6 まとめ

A 中学校と B 中学校との比較では Q-U と描画に大きな違いはなく、今回導入した S-HTP (高知大方式生徒支援アセスメント) は、学校現場で導入することにより教員の生徒理解を深める効果が期待できる。今回 A 中学校で実施した教員のアンケートの回答からも、全員の教員が S-HTP の有効性は「ある」との回答だった。どのような有効性があるかの問い合わせには、「意外な結果が表れる場合があり生徒理解のひとつの手立てとなる」「表面上ではみえない心理が垣間見られた」「内面的なことが見えるため今後の指導に生かせる」などである。今まで Q-U の結果だけを関わる手立ての材料として、学級づくりに取り組み生徒の理解や支援にあたって来たが、これまで表面に現れにくく気づかなかった生徒への見方も変わったようだ。これは A 中学校において今回の研究が生徒にとっても教員にとっても、良い方向に向いた結果といえる。

ここでいえることの一つは、A 中学校では、今まで突発的な問題行動に対処することに時間をとられやすい状況があった。そのために、気にかかる生徒がいても十分に話を聞く時間もないことが多かった。逆に、B 中学校では継続してこの手法を用いており、問題行動が起こる前に支援や援助を行える状況があると考えられる。このように、関わる側が事前にゆとりを持って対応することで生徒も話を持ちかけやすくまた心を開きやすくなり、生徒と教員との人間関係がうまく構築できると考えられる。その結果として、学校が楽しくなり、生活全般の様子の変化とともに学力向上も期待できる。何らかの問題が起ころうから支援や指導を考えるのではなく、基本的な生徒への関心を深め、より広い視野を持って生徒を理解し、問題が起きていない日頃から予防的に生徒理解や生徒支援を行う手法として有効性が示された。

7 終わりに

今回の研究にあたり、描画が生徒理解に深くかかわることを知った。不登校やいじめなど学校現場での課題を解決するためスクールカウンセラーや保護者、関係機関等とも連携を取りながら進めているが、事象が起こる前からの支援や援助を忘れてはならないと感じた。この一年間で勉強できたことを、これから生徒理解に活かしたいと思う。

この研究にあたってご指導してくださった井上新平教授、近藤御風先生、精神神経科教室の心理士のみなさん、そして実践研究でお世話になった各中学校の教員方や生徒のみなさんに感謝を申しあげます。

<引用・参考文献>

- ・三上直子「S-HTP 法」統合的 HTP 法による臨床的・発達的アプローチ 誠信書房 2010
- ・河村茂雄「Q-U による学級経営スーパーバイズ・ガイド」中学校編 図書文化 2010
- ・二宮孝・中山正秀・諸澄敏之「今こそ学校にアドベンチャー教育を」心の教育実践プログラム 学事出版 1998
- ・藤岡秀樹「学校心理学から見た教育相談・生徒指導」～予防的・開発的視点に焦点を当てて～ 京都教育大学実践研究紀要 2010
- ・宮田徹・水田聖一「学校教育相談とカウンセリング・マインド」～教育とカウンセリングの関係について～